

# 大源太キャニオン活性化検討ワーキング 設置趣意書

新潟県南魚沼郡湯沢町土樽地区には、大源太キャニオンと呼ばれる景勝地がある。名称の由来は明確ではないが、急峻な大源太山と大源太湖をあわせた景観が米国のグランドキャニオンを連想させ、付近一帯（四十八滝～大源太湖～キャンプ場）を含めて、大源太キャニオンと呼ばれるようになったとも言われている。

昭和30年代に入り、夏の湯沢の観光地整備が望まれるようになり、大源太キャニオンへの観光施設の開発が脚光を浴びるようになった。

昭和48年には、大源太湖上流端付近の河岸段丘に青少年旅行村が整備された。これにより、夏場のキャンプ場として多くの人々が訪れるようになった。

昭和52年には、町の歩道整備の一環として希望大橋が架設され、大源太湖を周遊する遊歩道が整備された。その後、ゴルフ場や陶芸工房等が順次開設されている。

この様な中で湯沢町は、全国有数の豪雪地であるが、この積雪を活かしたスキーと温泉のリゾート地として発展し、ピーク時には年間約1,000万人の観光客が訪れていたが、近年は約430万人で推移している。

また、昭和60年代からのリゾートブームの中で、高層のリゾートマンションが多数建設された。これらは、地域に多大なる経済効果を与えるとともに、自然的環境や景観の急速な改変、地価の高騰等、地域生活に様々な影響をもたらした。

一方で湯沢町は、南北に縦貫する関越自動車道及び上越新幹線により、長岡方面や関東方面との広域的な結びつきが強いほか、国道17号、JR上越線により南魚沼市や群馬県みなかみ町方面など、隣接する都市間を結ぶネットワークが形成されている。

近年、地域活性化のため、恵まれた自然や高速交通網等の資源を活かし、年間を通して魅力ある観光地を目指す取り組みが進められている。

以上の様な状況のもと、湯沢町の観光拠点の一つである大源太キャニオン及びその周辺において、地域資源である豊かな自然環境を活かした観光施設等（砂防施設を含む）の利活用について検討し、観光及び地域振興に向けた活性化策を取りまとめることを目的として、まちづくりに関する学識者及び地域の関係者からなる「大源太キャニオン活性化検討ワーキング」を組織するものである。